

もらいぶる

昔は、一軒の家がおふるを沸かすと、隣近所の人が入れ代わり、立ち代わり、

「おしまいなはれんしたか。」「今晚は」の挨拶（湯一ぺんどうか。」

と言って、おふるに入りに来ました。これをもらいぶると言いました。

昔のふる桶は、木で造った丸い容器物で、高さが子供の首ぐらいまでありました。そして井戸水は、かなげ（鉄分）があつて、湯を沸かすと手拭いが茶色になるので、川水を運びました。

大人が仕事に疲れて帰ってくるまでに、おふるを沸かすのは、子供の仕事でした。

バケツに二杯、川水を汲んで棒こ（天秤棒）の先のかぎにかけ、肩にかついでふる桶まで運びました。ふる場では、ふまいつぎ（ふみ台）に乗っ



でバケツの水をふる桶にあげ、水が一ぱいになるまで何回でも運びました。

おふるは、わら（稲の茎を干した物）で沸かすのですが、たき口が小さいので、わらを半分に分けてみたり、株の方から入れてみたり、色々工夫しますが、燃えなくて泣いたこともありましたが。

昔の燃料は、わらでしたから、釜の下はすぐ灰で一ぱいになりました。その熱いわら灰を取り出さないことには、おふるが沸かないので、火ばしで、がながん（トタン、ブリキ）箕に取り出ししました。

熱いしねえー。慌ててかど（外）まで走ると、熱いわら灰が散って怖かったものです。しかし、夜になると、隣、近所の人がおいでるので、にぎやかでした。

熱ければ水、ぬるければ火をたいてあげたけれど、家のもん（人）が一番最後で、少ないお湯でも我慢して入りました。足首から一寸（三・三セ

ンチ）ぐらいしか湯がなくて、十分には洗えませんでした。

どうしてって思うでしょう。だって、水は川から汲んで来なければならぬし、燃料のわらは、縄や、米俵や、むしろ（敷物）の材料になったから、きつとおとまし（惜しい）かったんだと思います。でも、次々と代わっては人がおいでで、おふるの番の日は、とても楽しかったです。

